

## 三圃制農法<sup>さんぼ</sup>

松浦 純子

気候変動についてメディアが農業を取り上げる度に思いたす答案がある。

中世ヨーロッパで行なわれた三圃制を説明しなさいという問いに対して、「農地を春耕地、秋耕地、休耕地の三つに分け、一年で三回収穫する」という答案だ。三つに分けるところまでいいが、一つの農地から一年間に三回も収穫？ 今より技術が進んでいる!? 休耕地からも収穫できる？ あっ！ また次も同じ答えだ。

ヨーロッパで主食の麦は、肥沃な三日月地帯が原産地。一方、米はインド東部から中国南部が原産地。両地域はほぼ同緯度で紀元前七〇〇〇年頃に栽培が始まった。分かりやすく日本の主食の米を考えると、北海道で米作りが始まったのは一九世紀後半だからそれ以前の時期を考える場合、北海道を除かなくてはいいけない。地図帳を見ると、本州から九州までの位置は地中海と同緯度くらいで、ほとんどの西ヨーロッパ諸国は北海道より北にある。だからヨーロッパは涼しいと分かるはずだ。正確に考えるには地形・海流なども考慮に入れなくてはいいないが、こういう地域で一年に三回も収穫することは難しい。もちろん日本では室町時代に米、麦、そばの三毛作が出現したが、比較的暖かい畿内でのことである。流行りの地政学に遅れないためには地図に親しむ必要があると思う。

さて、三圃制とはどのような農法か。それは農地を三つに分けて、まず一つ目の農地では春に耕して種をまき秋に収穫する（大麦・燕麦）。そして地力を回復させるために一年間土地を休ませ牛や豚を放牧する。その養分たっぷり土地を秋に耕して種をまき春に収穫する（小麦・ライ麦）。二つ目の農地では秋に耕すところから始まり、三つ目の農地では放牧から始まる。一つの土地についてみると三年二毛作である。詳しく言えば春に収穫した後、牛を使って土壌を深く掘ったり、土を上下反転させたりする。三圃制は一八世紀末まで八〇〇年程続いた。働きものの牛や豚は役目を終えると冬に農民の胃袋へと消えた。

|     | 12月            | 6月  | 12月             | 6月                | 12月 | 6月 | 12月 |
|-----|----------------|-----|-----------------|-------------------|-----|----|-----|
| 耕地① | 春耕地<br>(大麦・燕麦) | 休耕地 | 秋耕地<br>(小麦・ライ麦) | 犁耕 <sup>りこう</sup> |     |    |     |
| 耕地② | 秋耕地            | 犁耕  | 春耕地             | 休耕地               |     |    |     |
| 耕地③ | 休耕地            | 秋耕地 | 犁耕              | 春耕地               |     |    |     |